

先月号において大祓祝詞の眼目とも言うべき「天津祝詞の太祝詞事を宜れ。」の文章の言霊原理による説明が完了しました。大祓祝詞の罪穢の修祓とは個々人の行為の善悪の判定・裁判のことではなく、世の中に集積される罪穢を人類文明創造の材料として摂取し、言霊原理に基づく光の言葉、即ちタカマハラナヤサの歴史創造の行為の中に取り込んで行き、影を光に、悲歎を歡喜に、混乱を調和に轉換し、皇祖皇宗の人類歴史創造の経綸を推進して行く事でありました。

「天津祝詞の太祝詞事を宜れ。」の意味が以上の如く解明され、御理解頂きますと、その個所に続く大祓祝詞の文章は一貫した筋が通ったものとして理解する事が可能となって来ます。先ず大祓祝詞の解釈を次に進めることにしましょう。

斯く宜らば、天津神は、<sup>あめ いはと ひら</sup>天の磐門を押し披きて、<sup>いづ ち</sup>天の八重雲を<sup>きこし め</sup>巖の千別きに千別きて<sup>わ</sup>聞し召さむ。国津神は、高山の末、短山の末に上りまして、高山の<sup>ひき</sup>いほり、短山の<sup>か</sup>いほりを<sup>か</sup>澆き分けて聞し召さむ。

### 斯く宜らば

大祓とは天皇（スメラミコト）の人類歴史創造の光の中に影である罪穢を自然消滅させることであると宣言されると、いう事であります。

### 天津神

先に天津罪とは人間頭脳内の言葉の原理、即ち言霊原理の秩序を乱す形而上の罪であり、国津罪とは個人や人間社会の秩序を乱す個人的な形而下の罪であると言いました。天津神とはその天津罪に対応する言葉で、言霊の原理を自覚して、その原理・法則を活用して社会の政治を司り、人類社会の歴史創造に直接携わる人のことでもあります。

### <sup>あめ いはと ひら</sup>天の磐門を押し披きて

磐門は五十葉戸のことです。五十音言霊の原理・布斗麻邇は長年月の間、社会意識の底に隠されてきました。神倭朝第十代崇神天皇による三種の神器と天皇との同床共殿（床を同じくし殿を共にする）制度の廃止の事実であります。この決定以来、日本の朝廷の政治は言霊布斗麻邇の原理に頼ることのない、弱肉強食社会に於ける権力政治に移行することになりました。その結果、わが国伝統の精神原理は日本人の潜在意識の底に隠れ、生存競争社会が現出し、その社会土壌の

中から人類世界の第二の物質科学文明が花咲いたのであります。この人間生活に便利な科学文明は誠に結構な物質的恩恵を与えてくれる反面、この生存競争社会を人類生命存続の危機という想像もつかない運命の中に人々を叩き込むことになりました。正に人類文明転換の時であります。この時に当り、数千年来朝廷に於いて称えられ、予言されて来た大祓祝詞の「天津祝詞の太祝詞事を宜れ。」の大宣言に応えて、天津神が立ち上がることとなります。即ち法華経の「從地涌出の菩薩」の譬えの如く、復活した言霊布斗麻邇の原理を学び、これを活用して人類の第二文明時代を第三の生命文明時代へ転換する偉業に携わる人々が世の中に輩出し、その結果、この地球上に大昔にそうであった如く天津日嗣天皇（スメラミコト）の人類文明創造の朝廷が成立し、精神と物質双方の究極の真理を供えた平和にして豊潤な社会が建設されて行くこととなります。

**天の八重雲<sup>いづちわ</sup>を嚴<sup>きこめ</sup>の千別<sup>きこめ</sup>きに千別<sup>きこめ</sup>きて<sup>きこめ</sup>聞し召さむ**

天の八重雲については祝詞の初めの所で説明しました。それは天津太祝詞音図の八父韻の並び、タカマハラナヤサの順序が示す生命の調和をもたらす根本原理の事であります。「天の」は先天構造の意。八重雲はそのタカマハラナヤサの先天構造から現出する生命調和の法則のことです。「嚴の千別きに千別きて」とは御稜威(嚴)の道理(千)を諸々に黄泉国の文化それぞれの上に投入して、生命調和の道に摂取して行く事です。「千別け」とはそれぞれの内容を生命の道理の構造の中に取り込んで行く事、と言った意味です。「聞し召さむ」とは、天皇の宣言を聞いて、その内容を理解して、その趣旨の沿った行為でお答えするの意であります。

**国津神は**

天津神が五十音言霊の原理を活用することによって朝廷の政治を行う人であるのに対し、国津神とは天津神の行う政治の下に、その恩恵を受ける国民の事です。

**高山<sup>ひき</sup>の末、短山の末に上がりまして**

短山のルビに「みじかやま」と書いてある古い祝詞の文章に出会う事がありますが、意味は変わりません。高山・短山の事は先月号にて

自高 天 覚原	高山	ワ ヰ エ ヲ ウ		ア イ エ オ ウ
無黄 自泉 覚国	短山	ウ ヲ エ ヰ ワ		ウ オ エ イ ア

触れましたが、ここで再び説明することとしましょう。言霊原理の結論である天津神籬、天津太祝詞図の母音は上よりアイエオウと並びます。この並びを上下にとった百音図を作りますと、上下の中央の横の線を境に言霊図は全く対称形となります（参照）。この百音図を昔、百敷の大宮と呼びました。この百音図を構成する対称の上下の音はいずれも同じ音であり、実相も同じであります。その状況は全く違って来ます。上は光の世界、下は影の世界、上は高天原、下は黄泉国、上は言霊自覚の世界、下は無自覚の世界であります。

こうお話ししてもお分かり難いかもしれませんので、仏教の六道輪廻の教えを例に引きましょう（図参照）。この図は人間の心の進化の順序、下からウオアエイを上段にとりました。仏教ではその進化を衆生（ウ）声聞（オ）縁覚（ア）菩薩（エ）仏陀（イ）と教えます。下段はそれと対称的に上から人間（ウ）修羅（オ）畜生（ア）餓鬼（エ）地獄（イ）と示されます。上段は仏教自覚の世界で、下段は無自覚の世界、上下対称のそれぞれは行為の内容は似ていますが、境涯は全く極楽と地獄の違いとなります。（ア）の項を例にとりましょう。上段の（ア）は縁覚の悟りの次元です。心の一切の束縛から離れ、心の自由を得た初地の仏の自覚の境涯です。ところが、下段の（ア）は畜生界であります。自由に振舞うこと畜生の如く、大小便を垂れ流し自由、善悪の識別もなく傍若無人の行動となります。他の（イ）（エ）（オ）（ウ）の諸次元についても同様な事が言えます。自覚の有無、光の有無が想像もつかない相違をもたらす事をご理解いただけませんか。人間とはその心掛けによって神ともなり、また獣にもなるとはこの事を言うのであります。またこの人間の分際を知り尽くした皇祖皇宗の人類歴史創造の経綸の御苦心も窺い知ることが出来るというものでありましょう。

「高山の末、短山の末に上がりまして」の高山の末は言霊ア、短山の末も言霊アであります。言霊アの境地に視点を置くと物事の実相を最もよく見ることが出来ます。

**高山のいほり、短山のいほりを漕ぎ分けて聞し召さむ。**

「高山のいほり、短山のいほり」とは五百理の意で、五（アイエオ

六道	天 上	仏陀	イ
		菩薩	エ
		縁覚	ア
		声聞	オ
		衆生	ウ
		人間	ウ
	地 獄	修羅	オ
		畜生	ア
		餓鬼	エ
		地獄	

ウ)を基本原理として組み立てた百音図の法則の事であります。そこで高山のいほりとは、百音図の中の上段の原理、短山のいほりとは下段の原理という事となります。

「澁き分けて」とは、「書き分け」の謎です。上段の法則と下段の法則とを書き分けるとは如何なる事なのでしょう。上段は言霊原理自覚・活用の高天原の世界の原理であり、政治を行う方の物の見方、即ち言霊原理そのものの世界の事です。下段は言霊原理を自覚せず、黄泉国の物の考え方、即ち概念的知識を基本とした考えを以て生活を営む人々の集まり方であります。

政治を行う場合、朝廷の政庁に於いて、言霊原理に則り「かく為せ」の方針が決定されましても、その上段の決定をそのまま国民に示しましたのでは、言霊原理を自覚しない国民の側はその内容・方針・目的が理解出来ません。そこで「書き分け」が必要となって来ます。言霊原理から見た真実の宣言を、国民全体が理解し、喜んで受け入れ、実行出来るよう、世間的な言葉即ち概念的な言葉に書き直して発令されます。これが書き分けであります。こうする事によって天皇(スメラミコト)の政治が広く国民の生活に適合し、国民は喜んでこれに従う事となります。即ち「聞しめさむ」となる訳であります。概念的、経験的な知識による言葉から発想された方針や計画がそのまま概念的な言葉を以て発表される時、その政治を受ける側の経験知識との齟齬・誤解が生じ、混乱が生じます。光が当らぬ影の領域の政治に付きまとう混乱・騒擾はすべてここに起因します。けれど言霊原理に則った光の言葉を書き分けた概念的な言葉の宣言には誤解を生む余地はありません。「光と影」として前号で詳しく説明いたしました。

大祓の文章を先に進めます。

斯く聞しめしてば、<sup>すめみまのみこと</sup>皇御孫命の<sup>みかど</sup>朝廷を始めて、<sup>あめのしたよもつ</sup>天下四方の国には罪  
と云ふ罪は在らじと、<sup>あしな</sup>科戸の<sup>やえくも</sup>風の、<sup>あした</sup>天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝  
のみ霧夕<sup>ゆうべ</sup>のみ霧を、朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、<sup>おほつべ</sup>大津辺に居る大船  
を、<sup>へ</sup>舳解き放ち、<sup>とも</sup>舳解き放ちて、<sup>おほわたのはら</sup>大海原に押し放つ事の如く、<sup>おちかた</sup>彼方の  
繁木が本を、<sup>はら</sup>焼鎌の敏鎌もて、打ち拂ふ事の如く、遣る罪はあらじと、  
被ひ給ひ清め給ふ事を、

### 斯く聞しめしてば、

大祓祝詞の眼目である「天津祝詞の太祝詞事を宜れ」が実行され、天津神である朝廷に於いて政治を執り行う人達は復活した言霊の原理を以て黄泉国の文化の上に投入し、そのすべてを人類歴史創造の糧とし、吸収して行く事によって大祓の宣言の趣旨にお答えし、国津神である一般国民は朝廷の言霊原理による新しい政治が国民に理解出来るよう、その内容を平易な文章に書き直された法令によって納得し、従う事になるならば、……という意味であります。

すめみまのみこと みかど あめのしたよもつ  
皇御孫命の朝廷を始めて、天下四方の国には罪と云ふ罪は在らじと、

数千年にわたり朝廷に於いて、六月と十二月の年二回、予言されて来た大祓の宣言が実行に移されることになり、天孫降臨と神話に謳われます言霊原理の自覚・保持者、霊知りの邇々芸命の集団がこの日本に国を肇めて以来の天皇の政庁を始めとして、全世界の国々には、長い間に溜まっていた諸種のコンプレックスである罪は消え去ります。そして三千年にわたる暗黒の時代とは全く違った新しい文明時代の幕が切って落とされる事となります。では大祓が毎年宣言・予言され、その基礎原理である言霊の原理が社会の表面から浮没していた長い歴史の時代は、日本の朝廷はその間如何なる経過・変遷を経て来たのか、を振り返ってみましょう。それについて恰好の先師の文章がありますので、敬意を表し此処に引用することとします。

『その昔、行われた天孫降臨は、世界の高天原地方から生命の主体の原理を把握した覚者神人の団体が、平地に降って、合理的な国家社会を地上に創設した事であった。その人類最初にして然も永劫不変、天壤無窮、万世一系の道義社会の責任者、指導者、経営者が天津日嗣天皇として、全人類に祝福された伝統を、その間必要な或る時期には天の岩戸隠れ、入涅槃の過程を辿りながら、また時に当面の経綸の企図方針に応じて、幾度か皇朝の変革維新を行いながら、三種の神器であるその原理そのものの伝統は、今日まで連綿として悠久一万年に亘る歴史を経過しつつ、高天原日本のうちに継承保全して来た。これが皇御孫命の朝廷の歴史を通じての真姿である。』

天皇が毎年行って来た新嘗祭及び大祓の「御贖<sup>みあらか</sup>の儀」は一代に一度行われた即位式大嘗祭の儀を小規模に繰り返す式典であって、「御麻」「節折<sup>よお</sup>り」「壺」等の儀がある。この祭典に執行されるすべての仕草(動作)と、これに用いられるすべての器物は、悉くこの不変不滅、恒常普遍的の伝統の原理を形と動作を以て示し現わした黙示であり、呪事呪物である。すなわち此の仕草と器物は文章(言葉)を以て示された大祓祝詞に内臓されている原理と一体をなすものであり、また言霊五十音布斗麻邇であるこの原理を同じように呪文を以て黙示してある古事記、日本書紀の内容ともまた同一の意義を有するものである。呪文呪事を呪文呪事と知ってその謎を釈いて、その真態を現わす時、神道とは唯一の系列の布斗麻邇三種の神器の原理であることを知る。

崇神朝に於ける三種の神器の同床共殿廃止以来、正法が隠没している像法末法の二千年間に於ける天皇の最も重大な仕事は、斯くの如き黙示(呪文、呪事、呪物)として示されている原理の意義を式典の形を以て継続保持することにあつた。それはやがて再びこの原理の実体を以て、いずれ新しく創造される人類の第二の文明である科学をその原理の中に総合摂取し、またその像法末法の間には発生した罪穢すなわち社会内容の矛盾撞着を贖い修補するための人間性の不滅の原理を、祭典の形りで今日まで保存する事であつた。二千年の経過の後、今日世界に罪穢が横溢充満し、矛盾混乱が頂点に達して、再び新たな天孫降臨すなわち天の岩戸開きが必然である歴史的な時期がいよいよ廻つて来た。

宮中や神宮に於ける呪事である儀式祭典の動作は猿芝居だと評されている。その本物ではない芝居の仕草だけを、中実わきまえずに、よい年寄達が衣冠ものものしく、鹿爪らしく勿体ぶって、何時までも繰り返し演じているだけで事が済む時代ではない。「五串立て御酒おへまつる神主のうずの玉影見ればとぼしも」と古歌は擲<sup>やゆ</sup>擲している。呪文呪事の謎を釈き、芝居の型を黙示本来の生粋の姿である言霊に還元して、以て言葉と文字で示す申す神の顕示たらしめて世界に開明する時である。

全人類の精神的な至宝であり、凡そ人間たる以上、民族人種の区別

なく、誰でもが持って生まれているが故に、人類の共通普遍の財産である三種の神器、言霊布斗麻邇を把握運営する責任者は、<sup>すくな</sup> 尠くとも過去三千年、祖先の努力と守護によって原理の連綿たる伝統を保持して来た天孫民族日本人である。この時この日本人が蹶起して、今日までの岩戸隠れの時代のものとしての朝廷あるいは政府とは、その存在と意義と使命を異にする世界の高天原日の本の政庁、法庁、教庁を新たに復元建設し、この原理の内容をみずから聞召し自覚し、全世界に普く積み明かして、比類なく優秀なこの道理を以て、劫末澆世の極に到っている人類社会を大祓する時、歴史の此处にその三千年にわたる自然生活（天津菅麻）生存競争（天津金木）の渾沌が整理されて、人類文明は永劫不変の調和を実現する新しい時代に向って、輝かしい第一歩を踏み出すこととなる。』（小笠原孝次氏著「大祓祝詞解儀」二十八～九頁）

長く先師の文章を引用いたしました。祝詞の「斯く聞しめしてば」とは、この引用した文章が示す如く、皇御孫の朝廷が一万年にわたる変遷の歴史の末に、大昔に在ったと同様の政治の機構と内容を整え、世界人類の第三文明時代建設に向って機能し始める事を意味しています。祝詞の此处より以下の文章は、その本来の天皇の政庁・教庁が活動を開始する時には次の如くなるぞ、という事を述べることとなります。

<sup>しなど</sup> 科戸の風の、<sup>やえぐも</sup> 天の八重雲を吹き放つ事の如く、

古事記上つ巻「子生み」の章に風の神、名は志那都毘古の神とあります。言霊フのことです。心の先天構造の内容（志）のすべて（那）を言葉（都・<sup>みやこ</sup> 霊屋子）とする働き（<sup>ひこ</sup> 毘古）の事であり。人間頭脳内で心の先天構造（十七言霊・<sup>あな</sup> 天名）が活動を起し、それが先ず何なのか、イメージが形成され（<sup>まな</sup> 未鳴）、次にその未鳴に言葉が結び合わされ（<sup>まな</sup> 真名）、次に口腔にて発音され（<sup>かな</sup> 神名）、現実の言葉となって空中を飛びます。この様に人間頭脳内の正系の働きによって発音・自覚された言葉によって天津日嗣天皇の人類文明創造の政治の訓令（天の八重雲）が全世界に向って発表され（吹き放つ）、各地に滞りなく伝えられるように、という意味です。

あした ゆうべ はら  
**朝のみ霧夕のみ霧を、朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、**

高天原の言霊布斗麻邇の原理に則った実相そのままを表わす言葉ではなく、黄泉国の個人々々の経験知識の言葉による社会には必然的に歪が生じ、世の中全体が霧に包まれた如くに真実の相が把握できなくなります。そこに陰陽（朝夕）の塩盈つ珠、塩乾る珠（父韻）の操作宜しき政治の運用によってその霧を吹き払い、明るい実相に満ちた世の中を実現することのように、の意であります。

おほつべ へ とも おほわたのはら  
**大津辺に居る大船を、舳解き放ち、艫解き放ちて、大海原に押し放つ事の如く、**

大津辺とは港のこと。大船の舳とは舟の船首、艫とは船尾のことです。では船は何を表すかと言いますと、仏教で謂う大乘・小乗、即ち人の心を乗せる乗物の事であり、伊勢神宮の御神体である八咫鏡を乗せている船形の台、これを御船代みふねしろと呼びます。大船とありますので、大乘の乗物の事で、祝詞の大船は大船中の大船である人間精神最高の構造を示す天津太祝詞音図のことであります。地球人類を乗せて、物心共に豊かで調和のとれた世界歴史創造の海を航海するべきこの精神の大船は、ここ二・三千年の間、船首も船尾も港の岸壁に繋がれて海に乗り出す事がありませんでした。天照大神は岩戸深く隠れてしまいました。代って須佐之男命（八拳剣）と月読命（九拳剣）という船がわがもの顔に大海原を往き来していたのです。大船である五十音図の船首とは五母音の並びの事であり、船尾とは半母音の並びの事です。御承知の如く須佐之男命の八拳剣の判断力は主体を表わす母音の並びと、客体を表わす半母音の並びの双方の自覚を欠きます。月読命の九拳剣の判断力は主体である母音の自覚はありますが、客体である半母音の自覚がありません。須佐之男命の物質科学は主体を捨象し、客体を抽象して、主体と客体との間の現象だけを追及します。月読命である宗教・芸術は主体の自覚はありますが、客体についての決定的結論は出す事が出来ません。宗教・芸術が世界人類全体の問題に結論を示すことが出来ずにいるのも、この理由からです。この暗黒の二・三千年間、船首が真直でない、船尾の舵がしっかりしていない船が歴史創造の海を右往左往していたという事が出来ます。人類生存の危機が迫



って来たのも当然であります。

この時、天照大神の天津太祝詞音図である十拳剣という完璧な判断力を備えた大船中の大船を、舳先の綱も艫綱も解いて、いよいよ世界人類六十億人を乗せて第三文明時代の大海原に出航させる事となります。日本の古歌はこの事を次のように称えております。

なかきよの とおのねふりの みなめさめ  
なみのりふねの おとのよきかな

おちかた 彼方の繁木が本を、はら 焼鎌の敏鎌もて、打ち拂ふ事の如く、遣る罪は  
あらしと、

「彼方の繁木が本」とは並んで生えている木の枝が無数に分かれて茂り、何処が幹でどこが枝だか見当がつかなくなった状態の事です。茶の木は枝の先の茶の葉を摘み易くするために、枝先を円形に切り揃えます。そのため枝は四方八方に枝を分け、枝と本との区別がつかなくなります。茶の木林などと呼びますが、これは複雑な哲学理論が入り組んで、論と結論の区別がつかない事に譬えられています。この元も先も分からない枝を、「焼鎌の敏鎌」即ち鋭い鎌でもって、混み合っている枝をバサバサ斬り拂ってしまうように、個人の経験に基づく哲学理論のアイマイさを斬り拂ってスッキリと論・結論をはっきりさせてしまえば、という意味であります。「焼鎌の敏鎌」という鋭い鎌(カマ)とは、古事記子音創生の順序、タトヨツテヤコエケメ、クムスルソセホへ、フモハヌ、ラサロレノネカマナコのカマに当ります。この「カマ」とは、人間の心が言葉となり、空中を飛び、人の耳の中に入り、復唱され(ノネ)、それが何を意味するか、心中に煮詰められます。その上でその内容(ナ)が明らかになり、結果(コ)が確定され、言葉としての現象が終結します。カマとは釜で、煮詰める道具でもあります。言葉の内容を煮詰める釜(カマ)、複雑な枝を斬り拂う鎌(カマ)、そこに言葉発生の正系の順序を経た言葉が、複雑な黄泉国の経験知の言葉を判別して行く厳正な作用を汲み取る事が出来ましょう。

以上のように、皇御孫命の文明創造の政庁の言霊原理に則った政治の布告が、その内容の実相そのままに世界の人々に伝わり、何の疑念もなく人々が第三文明時代建設の使命に喜び勇んで発進して行く事と

なるならば、人々の心中にわだかまる一切の罪穢は消えてしまう事になりますから、の意であります。そうなりますと、朝廷の政治の布告が作成され、人々に伝えられ、結果がどの様になって行くか、第三文明時代の政治状況が次に明確に述べられます。大祓祝詞の総結論であります。

高山の末<sup>ひき</sup>、短山の末より、さくな垂<sup>だ</sup>りに落ち、沸<sup>たき</sup>つ速川の瀬<sup>ま</sup>に座す、  
瀬織津<sup>せおりつ</sup>姫と云ふ神、大海原<sup>おおわたのぼら</sup>に持ち出でなむ。斯く持ち出で往なば、荒  
塩<sup>やほぢ</sup>の塩の八百道の八塩道の、塩<sup>やおあい</sup>の八百会に座す、速開津<sup>はやあきつ</sup>姫と云う神、  
持ちかか呑みてむ。斯くかか呑みてば、気吹戸<sup>いぶきど</sup>に座す気吹戸主と云ふ  
神、根国底国<sup>ねのくにそのくに</sup>に気吹き放ちてむ。斯く気吹き放ちてば、根国底国の座  
す速佐須良<sup>はやすさら</sup>姫と云ふ神、持ちさすらひ失ひてむ。

以上、柿本人麻呂の美辞麗句の詩的表現によって新しい四人の神名が出て来ました。これが第三文明建設時代に於ける政治の内容を示したもののなのだとは読んだだけでは到底理解し難いことではありますが、解説を進めて行く事にしましょう。